

看護者の異文化間能力に関する文献検討

小野聡子*1 山本八千代*2

1. はじめに

看護者が文化の異なる対象者へケア提供を行う際、看護者には異文化間能力 (Cultural Competence) が必要とされている。これは、ケアの受け手が有する文化に敏感になり、それに合致するケアを提供する能力のことを言い、1950年代にLeiningerによって提唱された概念である。Leininger¹⁾は文化が人間の生活様式の全体あるいは統一体に焦点をあてているため、文化を考慮したケアは、宗教 (スピリチュアル)、親族関係、政治、法律、教育、技術、言語、背景となる環境、世界観といった全てを尊重するものであるとしている。

わが国では、経済連携協定Economic Partnership Agreement (以下、EPAとする)に伴い、本格的な外国人看護師の導入が開始されるようになった。EPAにより来日した外国人看護師候補生 (以下、候補生とする) は日本人と異なる文化背景を有している。一方わが国では、外国人登録者数は年々増加の一途をたどっており、日本人看護師が異文化背景を有する外国人へケアを提供する機会が増加している。

候補生が日本人対象者へ適切な看護ケアを実践する、あるいは日本人看護師が外国人対象者へ適切なケアを実践するためには、ケア提供者の高い異文化間能力が重要となる。しかし、候補生に提供される研修は、主に言語能力の習得に重点が置かれたもので、異文化間能力を高める教育は十分とは言えない。また、日本人看護師に対する異文化間能力を高める教育はほとんどなされていない。

欧米諸国では、自国の看護師および移民看護師に対する異文化間能力を高める教育が幅広くなされている。その背景には、長年移民を受け入れてきており、自国の看護師と移民、移民看護師と自国の住民というケア提供者とケアの受け手の文化が異なっていることが挙げられる。

本レビューでは、看護学領域における異文化間能

力の定義、構成概念、関連能力、影響要因および看護者や看護を学ぶ学生の異文化間能力を高めるための教育について示す。それらを通じ、EPAにより来日した候補生教育の課題を検討する。

海外文献に関しては、MEDLINEを利用し、キーワードを「cultural competence in nursing」として、過去10年間のAbstractの掲載があるものに限定して検索した。国内文献に関しては、データベース医学中央雑誌を利用した。「cultural competence」、「カルチュラルコンピテンス」、「異文化間能力」といったキーワードではヒットしなかった。そのため、看護における異文化間能力に関連すると考えられる「異文化間看護」、「外国人看護師」、「在日外国人」AND「看護」のキーワードを用い、過去10年間の原著論文を検索した。

MEDLINEから抽出された文献のAbstractの内容から、特定の看護学領域に限定したものや、本研究目的に合致しないと判断した文献を除いたところ、13文献が残った。データベース医学中央雑誌では、各キーワードから抽出された文献のうち、重複したものや異文化間能力に関連する内容が記載されていないものを除き21文献が残った。最終的に34件の文献を調査対象とした。それらを内容に基づいてカテゴリ化した結果、「異文化間能力の定義・概念」、「異文化間能力に関連する能力」、「異文化間能力の影響要因」の3カテゴリが抽出された。

2. 異文化間能力の定義・構成概念

Campinha-Bacate²⁾は、文化的考慮がなされたヘルスケアサービス実践の枠組みとして、異文化間能力プロセスモデルを考案した。このモデルでは異文化間能力を以下のように説明している。①異文化間能力は継続したプロセスである、②それはヘルスケア提供者がクライアントの文化を尊重しながら彼らと効果的に関わる能力を獲得するための努力の道筋

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健看護学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先) 小野聡子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail : w5309006@kwmw.jp

を示したものである、そして③このプロセスは、「文化的気づき」、「文化的知識」、「文化的技能」、「文化的接触」、「文化的欲求」という5つの構成概念を含む。

Purnell³⁾は、異文化間能力をクライアントの文化に合致したやり方でケアを適応させるプロセスとし、その内容を示した。これは、「無意識的無能力」、「意識的無能力」、「意識的有能」、「無意識的有能」という4段階から成る、曲折のある、意識的なプロセスであるとしている。一方、Suh⁴⁾は、異文化間能力は「文化的に多様な集団やコミュニティと効果的に関わる能力に達することを目的とした継続的プロセスであり、注意深い意識、明確な知識、磨かれた技能、相違や類似といった文化的な性質に対する個人的で専門的でもある尊重を伴う」としている。異文化間能力の概念に含まれる属性は「能力」、「偏見を持たないこと」、「柔軟性」であるとしている。また、先行要件は、「認知的領域」として文化的気づきおよび文化的知識、「感情的領域」として文化的感受性、「行動的領域」として文化的技能、「環境的領域」として文化的接触であると述べている。

Jirwe et al.⁵⁾がスウェーデン人の視点から明らかにした異文化間能力の中心的構成要素は、5個のカテゴリーから成る。それは、「文化的感受性」、「文化的理解」、「文化的接触」、「健康、病気、ヘルスケアについての解釈」、「社会的、文化的背景」である。杉浦は⁶⁾、異文化間看護能力尺度を開発した。その中で、異文化間能力の構成概念は「異文化間看護の文化特定の知識」、「異文化間看護の技能」、「異文化間看護の文化一般の知識」、「接近—回避の傾向」、「自文化の認識」であると示した。

3. 異文化間能力に関連する能力

Calvillo et al.⁷⁾は、異文化間能力に関するカリキュラム開発の記述の中で、文化的に有能である大卒看護師の3つの特徴を以下のようにまとめている：「個人の文化、価値観、信念、考え方、行動への気づき」、「他の文化背景を有する個人に対する判断力とコミュニケーション力」および「異文化的な違いに対するアセスメント」。Axtell et al.⁸⁾は、地域社会に基づいた看護大学院カリキュラムに関する見解の中で、看護大学院生が獲得すべき能力は「自己認識」、「文化およびアイデンティティに関する基本的な知識」、「異文化間コミュニケーションを促進する態度」、「異文化的な臨床技術」および「アドボカシーに関する技能」の5つであるとしている。

大野⁹⁾は、米国の看護基礎教育テキスト内容を分析し、看護師に必要な能力は、文化的多様性を理解すること、対象者が文化的に満足のいくケアを受ける権利があることを理解すること、看護サービスにあたって文化的影響を考慮すること、異文化コミュニケーションを図ること等であるとしている。藤原¹⁰⁾は、看護者自身の準備が異文化間能力に関連するとしている。この準備とは、看護者が日頃のケア提供の中で、Campinha-Bacate²⁾のモデルで示された「文化的気づき」、「文化的知識」、「文化的技能」等を常に確認することとされている。

杉浦¹¹⁾は、国内看護職の外国人クライアントの看護に対する認識について明らかにした。8つのカテゴリーが抽出され、大切と認識する内容の上位には、「コミュニケーション方法」、「文化の考慮」、「看護技術」が挙げられた。そのうち、「文化の考慮」のサブカテゴリーとしては、クライアントの「文化の理解」、「文化の尊重」等があった。長谷川ら¹²⁾も同様の調査をし、外国人患者を受け持つ際の留意点で特に意識が高かったのは、「コミュニケーション」、「インフォームドコンセント」、「プライバシー」、「生活習慣」である。

林ら¹³⁾は、国際看護コラボレーター能力モデルを構築した。その中で、国際看護コラボレーターに必要な能力を、「基本的資質と知識」と「国際協力を展開する上で求められる能力」に分類した。「基本的資質と知識」に関しては、基盤能力と位置付け、「異文化と折り合う力」、「語学力」、「学際的知識」等のカテゴリーが抽出された。堀田ら¹⁴⁾は、外国人看護師の受け入れにあたって、日本人看護師が言語や外国に対する理解等を課題としていることを明らかにした。そして、外国人看護師との協働で重要なのは、日本人看護師と外国人看護師の双方向の理解であると述べている。宮野ら¹⁵⁾、宮下ら¹⁶⁾は、外国人看護師からケアを受けることを日本の患者がどう認識しているかを調査した。その結果、日本の患者が外国人看護師に対して求めていることは、日本語および日本の文化・習慣の理解であることが示された。林ら¹⁷⁾は、在日外国人の妊婦がもつ日本の外来診療に対する不満や要望を明らかにし、看護職者が対応すべき言葉、文化、生活面でのニーズに対して、個人が持つ文化的背景を柔軟に理解し尊重することを忘れてはならないと指摘している。

4. 異文化間能力の影響要因

Hayne et al.¹⁸⁾は、米国における外国人看護師の文化変容に加え、受け入れ側の外国人看護師の価値

観への気づきが相互理解を促進し、この教育が重要であると述べている。一方、Woodbridge et al.¹⁹⁾は、看護師自身に加え、指導者もその違いを認識する必要があると指摘した。さらに、Hunt²⁰⁾は、文化的に多様な労働力を効果的に管理するには、複雑な役割を担う管理者を支援し、個人を尊重するという組織的な文化を向上させる重要性を主張している。王ら²¹⁾は、外国人看護師の日本での保健医療活動への適応プロセスを示し、看護対象の文化的背景に対する認知能力といった個人的要因や、施設側の対応といった環境的要因が相互作用していることを指摘している。それら4編の論文は外国人看護師に関し論じたもので、受け入れた外国人看護師の異文化間能力へ影響する因子として、受け入れ施設側の教育や配慮が強調されていた。

野中ら²²⁾は、在日外国人患者と看護師との関係構築プロセスについて、看護師が患者との文化的相違を認識し、患者に歩み寄りながら、それを受け入れていくことで関係を発展させていることを示した。城ヶ端ら²³⁾は外国人への看護事例を報告し、その中で看護者の認識不足、患者との関係構築等の問題を挙げ、対象者の文化を尊重することの重要性を述べている。山本ら²⁴⁾および横川²⁵⁾らは、国際協力の経験の有する看護者を対象に調査を行い、違いを認識することの重要性だけでなく、異文化体験を行ったことで外国人に対する理解が深まった等、文化的接触に伴う意識変化を明らかにしている。

看護大学生を対象とした異文化間能力関連の調査研究論文が3編あった。Hagen et al.²⁶⁾は、異なる文化背景を有する人との出会いによって、ヘルスケア提供者は自己の異文化間能力を向上させると述べている。また、石井ら²⁷⁾と丹野ら²⁸⁾は、留学という異文化体験によって日本との看護の違いに気づき、自己の価値観を振り返ることができたと述べている。

Cowan et al.²⁹⁾は、文献レビューの中で、移民看護師のカルチャーショックに触れ、異文化間能力に関連したそのような問題に取り組むために効果的な対策を開発すべきであると指摘している。安達ら³⁰⁾、松尾³¹⁾および藤原³²⁾は、看護職者が外国人患者へのケアで感じた困難として、言葉に関する問題、文化風習、宗教、経済的問題等を挙げている。甲斐ら³³⁾は、看護者が国際協力で遭遇した困難として、派遣先での仕事に対する認識の違いや看護観の違い等を挙げている。

また、文化に関連した看護教育について記述された文献が2編あった。Reeves³⁴⁾は看護と社会を包括した演習コースの中で、最初に価値観をテーマに取り上げた。その内容は、価値観の明確化、健康、疾

患、ヘルスケアへの文化的価値観の影響等である。Hunter³⁵⁾は、構成主義とCampinha-Bacoteのモデルを組み合わせた教育が学習者の異文化間能力レベルを向上させたと述べている。

以上のように、異文化間能力を向上させるためには、違いを認識し、相互理解することが必要であると述べたものが多かった。

5. 考察

EPAにより来日した外国人看護師候補生の異文化間能力向上のための課題

看護者の異文化間能力を考えるにあたり、まず注目すべき点は文化的知識、文化的技能である。Campinha-Bacote²⁾は、「文化的気づき」、「文化的知識」、「文化的技能」、「文化的接触」、「文化的欲求」という5つの概念で異文化間能力は構成されるとしている。一方、Leininger³⁶⁾は、文化を超えた看護知識および能力の革新的な発展段階の第二段階として、文化を超えた看護理論および文化ケア能力を伴う研究に基づいた知識の獲得としている。看護実践においては、どのような看護ケアであろうとも、個々の看護者が優れた技術を有していることが求められる。そのような技術の習得には看護者の幅広い知識が基盤となっている。看護者の異文化間能力においても同様で、文化的知識があつてこそ文化的技能を身につけられると言えよう。

Campinha-Bacote²⁾は上記5つの概念が相互依存の関係にあると述べ、Leininger³⁶⁾も同様の主張をしている。文化的知識および文化的技能を獲得するには、文化的気づき（文化的感受性）が重要であることがわかる。文化的気づき（文化的感受性）は異文化に属する対象者に向き合うとき、自分も持っている偏見や差別、想定などに気づくことである。文化的気づき（文化的感受性）がなければ、看護者は文化的押しつけをしてしまう危険が生じる。個々の看護者が自己の文化に気づき、ケア対象となる人々のそれとは違うことに気づくことが、文化的知識や文化的技能の獲得につながり、看護者の異文化間能力は高まっていく。

EPAにより来日した候補生の異文化間能力向上についても同様で、まず彼らは日本人対象者や家族の使用言語を始め、信念、習慣、病気、治療および看護に対する考え等に目を向けなければならない。候補生の認識の実態については明らかにされていないが、日本の看護師国家資格を有し日本の医療機関に勤務する外国人看護師に対する王ら²¹⁾の研究がある。看護業務遂行中に経験した「困難」、「戸惑い」等の内容を明らかにしたものである。その中で外

国人看護師の認識として「親（患者）の身体を看護師さんが拭くなんて、日本人の家族は冷たいなと考えた」、「家族、親戚の面会が少ない」、「母国では家族が患者の生活ケアを行うが、日本ではスタッフがやっている」、「日本のケア、看護はシステム化されているので、家族の負担が少ない」等が挙げられている。外国人看護師が日本人対象者を看護する際に、自分たちが有する文化との相違や類似を認識することができれば、これらの戸惑いは軽減すると考えられる。

EPAで来日した候補生への異文化間能力向上を考えるにあたり、このことは重要なポイントとなるであろう。看護ケアにおいて、候補生が対象者や家族の日常生活に関する細やかな視点を持つことができれば、自国での臨床看護実践との相違を認識する文化的気づき（文化的感受性）はさらに高まると考えられる。そのためには候補生の実際の体験、日本人対象者への看護における候補生と日本人スタッフとの相互作用の実態を明らかにする必要がある。今後はこれらの調査を行い、候補生への教育内容の検討を進めていくことが重要となる。

6. まとめ

1. 異文化間能力は、看護者が対象者の文化に合致したやり方でケアを提供することを目的とし、必要な能力を獲得するために努力し続けるプロセスである。そのプロセスの中では、文化的気づき、文化的知識、文化的技能、文化的接触、文化的欲求といった概念が相互に依存し合っている。看護者の異文化間能力獲得のためには、文化的気づき（文化的感受性）が最も重要視される。
2. EPAで来日した外国人看護師候補生自身が文化的気づき（文化的感受性）を高め、異文化間能力を向上させるためには、看護ケアにおける日本人対象者や家族の日常生活に関する細やかな視点を持つことが重要である。
3. EPAで来日した外国人看護師候補生の実際の体験、日本人対象者への看護における候補生と日本人スタッフとの相互作用の実態を明らかにし、候補生への教育内容の検討を進めていく必要がある。

文 献

- 1) Leininger MM : What Is Transcultural Nursing and Culturally Competent Care?. *Journal of Transcultural Nursing*, **10**(1), 9, 1999.
- 2) Campinha-Bacote J : The Process of Cultural Competence in the Delivery of Healthcare Services : A Model of Care. *Journal of Transcultural Nursing*, **13**(3), 181-184, 2002.
- 3) Purnell L : The Purnell Model for Cultural Competence. *Journal of transcultural nursing*, **13**(3), 193-196, 2002.
- 4) Sue EE : The model of cultural competence through an evolutionary concept analysis. *Journal of transcultural nursing*, **15**(2), 93-102, 2004.
- 5) Jirwe M, Gerrish K, Keeney S and Emami A : Identify the core components of cultural competence : findings from a Delphi study. *Journal of Clinical Nursing*, **18**, 2622-2634, 2009.
- 6) 杉浦絹子 : 異文化間看護能力の現状と規定要因—青年海外協力隊看護職婦国隊員と公立総合病院勤務看護職の比較より—。 *日本看護科学会誌*, **23**(3), 22-36, 2003.
- 7) Calvillo E, Cleark L, Ballantyne JE, Pacquiao D, Purnell LD and Villarruel AM : Cultural Competency in Baccalaureate Nursing Education. *Journal of transcultural nursing*, **20**(2), 137-145, 2009.
- 8) Axtel S, Avery M and Westra B : Incorporating cultural competence content into graduate nursing curricula through community-university collaboration. *Journal of transcultural nursing*, **21**(2), 183-191, 2010.
- 9) 大野夏代 : 米国のテキストにおける「異文化看護」の記述内容の検討. *SCU Journal of Design & Nursing*, **1**(1), 15-21, 2007.
- 10) 藤原ゆかり : Culturally congruent careの概念分析. *日本助産学会誌*, **22**(1), 7-16, 2008.
- 11) 杉浦絹子 : 外国人クライアントの看護において大切と認識された事柄の内容分析—青年海外協力隊看護職婦国隊員と公立総合病院勤務看護職の比較—。 *日本看護科学会誌*, **16**(1), 40-49, 2003.
- 12) 長谷川智子, 竹田千佐子, 月田佳寿美, 白川かおる : 医療機関における在日外国人患者への看護の現状. *福井医科大学研究雑誌*, **3**(1・2合併号), 49-55, 2002.
- 13) 林直子, 田代順子, 菱沼典子, 有森直子, 平林優子, 平野かよ子 : 国際看護コラボレーターに必要な能力モデル構築と教育プログラムの開発. *国際保健医療*, **23**(1), 23-31, 2008.
- 14) 堀田かおり, 丹野かほる : 外国人看護師受入れに関する研究—看護職者の外国人看護師との協働に対する意識調査—。 *日*

- 本看護学会論文集（看護総合），39，107-109，2008.
- 15) 宮野真理子，丹野かほる：外国人看護師受入れに関する研究—外来受診者の外国人看護師からケアを受けることに対する意識調査—。日本看護学会論文集（看護総合），39，104-106，2008.
 - 16) 宮下典子，廣川佐代子，丹野かほる：外国人看護師受け入れに関する研究 看護サービス利用者のニーズから見た看護の課題。日本看護学会論文集（看護総合），37，269-271，2008.
 - 17) 林麻衣子，森淑江：外国人妊娠の外来診療に対するニーズ調査。群馬保健学紀要，23，101-108，2003.
 - 18) Hayne AN, Gerhardt C and Davis J：Filipino Nurses in the United States Recruitment, Retention, Occupational Stress, and Job Satisfaction. *Journal of transcultural nursing*, 20(3), 313-312, 2009.
 - 19) Woodbridge M and Bland M：Supporting Indian nurses migrating to New Zealand：a literature review. *International Nursing Review*, 57(1), 40-48, 2010.
 - 20) Hunt B：Managing equality and cultural diversity in the health workforce. *Journal of Clinical Nursing*, 16(12), 2252-2259, 2007.
 - 21) 王麗華，大野絢子，木内妙子：日本における外国人看護師の保健医療活動への適応実態—医療現場という視点から—。群馬パース大学紀要，4，465-472，2007.
 - 22) 野中千春，樋口まち子：在日外国人患者と看護師との関係構築プロセスに関する研究。国際保健医療，25(1)，21-32，2010.
 - 23) 城ヶ端初子，藤原聡子，中島小乃美，井上康子：マデリンM.レイニンガーの文化的ケア理論に基づく看護援助に関する試論。大阪市立大学看護学雑誌，4，11-19，2008.
 - 24) 山本真衣，鈴木ひとみ，川井八重，畑下博世：帰国した青年海外協力隊看護職隊員の在日外国人支援に対する意識と現状—海外での看護活動経験の活用—。看護・保健科学研究誌，8(1)，337-348，2008.
 - 25) 横川裕美子，森淑江，戸塚規子，浅野美智留：看護職による国際協力活動の還元に関する研究—国際看護協力の異文化適応の視点からの考察—。The Kitakanto Medical Journal, 52(5), 361-368, 2002.
 - 26) Hagen L, Munkhondya B and Myhre K：Similarities and mutual understanding：exchange experiences in Malawi for host and guest students. *International Nursing Review*, 56(4), 476-482, 2009.
 - 27) 石井美里，溝口満子，佐藤幹代，岡部明子，高橋奈津子：米国メイヨー・メディカルセンター短期留学における学生の体験と学び。東海大学健康科学部紀要，13，19-28，2008.
 - 28) 丹野かほる，齋藤君枝，石原清：ミャンマーにおける国際看護研修とその学習効果。新潟大学医学部保健学科紀要，8(3)，143-150，2007.
 - 29) Cowan DT and Norman I：Cultural Competence in Nursing：New Meanings. *Journal of Clinical Nursing*, 17(1), 82-88, 2006.
 - 30) 安達由希子，小川美奈子，佐竹紀子，日詰有希子，三河真弓，牧本清子：外国人患者のケアに関する公立病院の調査。大阪大学看護学雑誌，15(1)，19-31，2009.
 - 31) 松尾博哉：在日外国人母子保健医療の現状と課題—神戸市内産科医療従事者へのアンケート調査から—。周産期医学，34(2)，261-264，2004.
 - 32) 藤原ゆかり：異文化圏からの人々の出産に対する助産ケアの現状—文化を考慮したケアの実現に向けて—。日本助産学会誌，20(1)，48-59，2006.
 - 33) 甲斐仁美，佐伯圭一郎，影山隆之，草間朋子：看護の国際協力を推進するための看護教育のあり方 国際協力の経験をもつ看護職の調査結果をもとに。看護教育，46(2)，134-139，2005.
 - 34) Reeves JS：Weaving a Transcultural Thread. *Journal of Clinical Nursing*, 12(2), 140-145, 2001.
 - 35) Hunter JL：Applying Constructivism to Nursing Education in Cultural Competence A Course That Bears Repeating. *Journal of Transcultural Nursing*, 19(4), 354-362, 2008.
 - 36) Leininger MM and McFarland MR：TRANSCULTURAL NURSING：concepts, theories, research & practice. 3rd ed., McGraw-Hill, New York, 28, 2002.

（平成22年11月26日受理）

Cultural Competence in Nursing : a Literature Review

Satoko ONO and Yachiyo YAMAMOTO

(Accepted Nov. 26, 2010)

Key words : cultural competence, foreign nurses, cross culture

Correspondence to : Satoko ONO

Master's Program in Nursing, Graduate School of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail : w5309006@kwmw.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.20, No.2, 2011 507-512)